

## 「戦争児童文学教材」の可能性

埼玉大学大学院

佐藤 麗子

### 1. <研究の目的>

戦後の「戦争児童文学教材」は、「反戦教材」「平和教材」とも呼ばれている。これは、人類愛・平和への願いをこめた作品と言われるもので、実際に戦争を題材としている。最近、この分野の教材について、時代遅れといった議論もなされているが、実際には、教材として不可欠であるという根強い意見もある。

そこで、この教材の価値、意義という観点から、「戦争児童文学教材」の歴史的な流れを押しさえ、その上で、「戦争児童文学教材」の持つ可能性について改めて考察してみたい。

### 2. <研究の概要>

#### (1)「平和教材」としての「戦争児童文学教材」の位置

「戦争児童文学教材」は、反戦平和教材としての意味を持ち、教材として戦争児童文学作品を扱うことの目的は、国語科においていかに「平和教育」を行なうかということであった。そして、現在、「戦争児童文学教材」がどのようなとらえられかたをしているのかを見、そこにおける問題点を整理すると、以下のような仮説が導かれる。

- ① 戦争児童文学の持つ特性と「平和教育」という教育的目的との間にはずれがあり「平和教育」としては矛盾する教材である。
- ② また、児童・教師の実態、授業実践の問題という視点から見ても、「戦争児童文学教材」は「平和教材」としては限界がある。
- ③ けれども、実際の指導場面においては、何らかの意義が認められるはずであり、それは、教材に本質的に内在する「対象喪失」に関わる問題であるだろう。

#### (2)「戦争児童文学教材」における「対象喪失」の意味

「戦争児童文学教材」に本質的に見られる悲しさ、暗さ、悲惨さは「対象喪失」という問題によってとらえ直すことができる。この「対象喪失」という観点からアプローチすることで、作品に共感することが可能となる。そして、この問題は国語科教育をめぐる議論が未開拓な「死の教育」の問題である。

#### (3)「死の教育」における「戦争児童文学教材」の可能性

「戦争児童文学教材」とは、悲惨な事態における人間の在り方を描いた作品である。また、文学という枠組みの中での事態であることから、克服できる程度のショックに留めることができ、いわば直接的ではないオブラートにくるんだ「死の教育」が可能であるといえる。その意味において、「戦争児童文学教材」は「死の教育」としての可能性があり、また今までの実践もその一端を担ってきたといえる。